

岸本英夫の生死観について

窪 寺 俊 之

【1】問題設定

岸本英夫（1903.6.27—1964.1.25）が昇天して既に34年が過ぎた。その間に、岸本の名前は宗教学者のみならず、一般の人たちの間にも知られるようになった。岸本が昇天した直ぐ後に各新聞社は彼の訃報を伝え、宗教学者の死を惜しんだ。朝日新聞は「東京大学文学部主任教授、二度の日本宗教学会会長、宗教学会の第一人者だった」⁽¹⁾と述べて、岸本が宗教学者として偉大であったと讃えた。翌日、「岸本英夫教授を悼む」と題して、東京大学教授嘉治真三が、岸本が宗教学者でありつつ、幅広い関心、精力的な活動、国際的働きでの貢献、配慮の行き届いた教育者であったなどと述べて、岸本の死を惜しんだ⁽²⁾。それに加えて、昭和38年10月ワシントンの日米文化会議の際、病気で倒れたが、会議への出席を止めるのにも聞かず、出席するなど「責任感の強さ」は人一倍強かったと、嘉治は書いている。ガンを負いながら毅然としてその人生を生き抜いた姿を賞賛したのである。この賞賛はその後も何度も繰り返されてきた。

死後、数年して、岸本英夫の論文を纏めた「死を見つめる心—ガンとたたかった十年間」（講談社）が出版されたとき、東京大学の文学部に在籍していた時代から同じ宗教学の道を歩んできた宗教学者増谷文雄が、その本の「序にかえて」の中で癌が発見されて以後の岸本の生き方と以前と比べて「刮目して見るに値するものであった」と述べている⁽³⁾。更に、「冷静に死を見詰めながら、毅然として、また猛然として生きはじめた」と書き、生き方が「質的な変化」をしたかの様であったと述べている。嘉治真三も増谷文雄も親しい友人の死を悼

岸本英夫の生死観について

みながら、故人への個人的感情を述べたのである。しかし、癌を負った宗教学者岸本英夫を直接研究対象とした研究は長い間為されなかった。その間に、ガン患者の数が増え、その人生を如何に完結するかが問題になる度に、岸本が引き合いにだされるが多かった⁽⁴⁾。その中で、岸本の死後18年程経って、やっと島田裕巳が岸本の宗教学の誕生を取り上げ、その思想的変化の過程を明らかにしようと試みた⁽⁵⁾。また日本倫理思想史的観点からは相良亨が岸本の生死観「死は別れである」を日本思想史的観点から論じて、この生死観が岸本の独創ではないこと、むしろ日本の伝統の無常観や自然観につながるものであると論じている⁽⁶⁾。島田は、更にそれから11年経って、岸本と癌との関係を取り上げた。「岸本の宗教学者としての社会的な活動は癌との闘いの体験があるからこそ、彼の学問的な業績は高く評価されてきた。業績の内容だけで評価されたわけでないのだ。特に十年にわたる癌との闘いの日は彼を神格化する方向に作用した。」と述べて、癌を負った岸本と、その業績の関係を問題にした⁽⁷⁾。

最近、岸本の直弟子の宗教学者脇本平也が癌患者としての岸本英夫と取り上げながら、岸本が主張した「死は大きな別れである」を宗教学的視点から検討している⁽⁸⁾。

岸本自身、1953年にメラノーマ（黒色腫）が発見されて死に直面させられるのであるが、死に到るまでの十年間に癌との闘病体験、死の問題、生死観、宗教観などについての論文、随筆などを多く発表した。

その中で1963年の「理想」11月号に発表した『わが生死観』は岸本が発表した論文の最後のものになる⁽⁹⁾。正確には、その後に『現代人と宗教』を「宗教と現代」に載せたが、生死観を扱ったものとしては『わが生死観』が最後である。

『わが生死観』は岸本自身の生死観を癌の闘病体験を踏まえて書いたもので、岸本の病苦や苦悩が岸本の宗教研究と重なって「死は別れである」という生死観となっていること、そして、その生死観に支えられて闘病生活をしたことが記されている。

ここで、私たちは作業を進めるために、仮に「生死観」を次の様に定義しておく。生死観とは、「死を視座に置きながらの自己理解、自己の生命観、死観な

どの思想体系」をいう。「生死観」は「死生観」とも言うが、生死観は「生」に重点を置くのに対して、死生観は「死」を視点にしながら生死全体を観察、評価、価値付けすることである。そして、死に直面した人は、自らの生死観を心の慰め、支え、希望（生死観の機能）にする。死に直面した人にとっては自分の現実の生を支える生死観をもつことが決定的に重要である。そこで、このような観点から岸本の生死観を見ることにする⁽¹⁰⁾。しかし、岸本はこの『わが生死観』の中で体系化された生死観を提起したとは言っていない。岸本は、後日さらに発展させて岸本の生死観を確立する積りであったようだが、病魔に襲われ、『わが生死観』の発表三か月後に帰らぬ人になってしまった。その意味で岸本の生死観は未完成のまま残されたといえる⁽¹¹⁾。ここでは未完成の岸本の生死観について論ずることに満足しなくてはならない。

この論文の目的は、癌患者としての岸本英夫の体験を整理しながら、岸本の生死観の形成時期や過程を明らかにしつつ、その内容の本質を明らかにすることである。そして、その生死観の機能を検討してみたい。岸本の癌体験は10年の間に変化し、多様な様相を見せた。終始、科学的合理的立場を堅持し、伝統的既存の宗教の約束する天国や極楽浄土を信ずることを拒否した⁽¹²⁾。岸本のこのような立場をも考慮しながら岸本の生死観の本質と機能を検討してみたい。これがこの小論の課題である。

【2】岸本英夫の死の体験

岸本はいつごろから、死の問題を考え始めたのだろうか。現在残されている論文の中で初めて死の問題が出てくるのは「生死観三態」⁽¹³⁾である。当時、岸本は東京大学文学部の宗教学科の講師として、研究と教育に励んでいたが、同時に、第二次大戦の勃発によって学生たちを戦場へ送り出さなくてはならなかった。当時宗教学科に入学した脇本平也は当時の岸本の様子を伝えている⁽¹⁴⁾。戦場に送られていく学生に対して岸本は「君たちはこれから戦争に行く。死ぬかもしれない。止むをえぬ。命を捨てろ。ただし、絶対捨て切りにはするな。捨てたその命を必ず拾って来い」⁽¹⁵⁾と激励したというが、それは戦争の厳しさを通ら

岸本英夫の生死観について

ざるを得なかった当時の学生に「捨てたその命を必ず拾って帰って来い」と祈りを込めた言葉であった。

この時の岸本にとっての「死」は学生たちの死であった。教育者としての岸本には断腸の思いがあったに違いない。教育者としての願いは学生の無事の帰還であっただろう。しかし、もっと辛いのは、自己が死に直面しなければならないことである。岸本はそれから九年程して自らが死の現実と直面することになる。癌を告知された岸本は外面的には毅然としていたようである。岸本自身、癌を負いながら、ますます活動する姿を見て回りの人は「手負いの猪」⁽¹⁶⁾と見たと言う。しかし、外面的には毅然としているが、内心は別の出来事が起きている。ここでは、岸本の内的世界を明らかにすることで、岸本の本当の姿に迫ることにする。

岸本の死の体験は癌体験と密接に結びついているので、次の二つのことを明らかにしたい。(1) 癌を負った岸本の死の体験、(2) 癌を負いつつ死をどのように生きたか。つまり、癌患者としての「岸本の死の体験」と「死の生き方」の二視点から岸本を明らかにしたい。

岸本の10年間の闘病生活を四期に分けて考察したい。ここでは癌発病から死に到るまでの岸本の経験を包括的に扱うが、全体を四期に区分する。その区分は病状の変化を重視したもので、各時期には時間的短長がある。この様に区分したのは、病状の変化が岸本の死の体験を左右しているのが明らかに見えるからである。

第1期（癌告知、入院、手術）（1954年9月18日—1958年11月＝約4年2月）

岸本は「死を見つめる心」に納められている文章の中でしばしば、癌が発見されたときの心情を吐露している⁽¹⁷⁾。それによると1954年9月に左頸部、顎の下の異様なカタマリが鶏卵大になり3日間程入院して、切開手術して検査した⁽¹⁸⁾。その結果は増殖性のものであることが明らかになった。1954年9月18日にスタンフォード大学外科医クレスマン博士からその事実を告げられたとき、岸本は咄嗟に癌と気付いた。クレスマン博士は「最悪の場合には半カ年の生命、

しかし、もっと望みがあるかもしれないことを告げた」⁽¹⁹⁾。この時から岸本の癌との闘いが開始した。

当時、岸本はアメリカのスタンフォード大学に招かれて(客員教授)、単身でw教授の家に寝起きしていたが、癌を知った日の様子を次の様に書いている。

「ソファーに腰を下ろしてみたが、心を、下の方から押し上げて来るものがある。よほど、気持ちをしっかり押しつけていないと、ジッとしていられないような緊迫感であった。われしらず、叫び声でもあげてしまいそうな気持ちである。いつもと変わらない窓の外の暗闇が、今夜は、えたいのしれないかたまりになって、私の上に襲いかかって来そうな気がした。」⁽²⁰⁾

癌告知されて、死の接近を感じている岸本英夫の感情は揺さぶられ、心は不安に満ち、激しい緊迫感に襲われている。岸本の書物から当時の体験を拾い上げてみると次のようになる⁽²¹⁾。(以下頁数は「死を見つめる心」(講談社文庫)の頁数を示す)。

1. 「寝耳に水」(p.54)
2. 「事態の重要さが理解できない程に戸惑っていた」(p.54)
3. 告知される前とは、自分が「別人のよう」に思えた (p.54)
4. 「取り残された」気持ち (p.55)
5. 「ジッとしていられないような緊迫感」(p.55)
6. 「叫び声をあげてしまいたいような気持」(p.55)
7. 「窓の外の暗闇がえたいのしれないかたまりになって、私の上に襲いかかって来る気がした」(p.55)
8. 「心の異常な昂奮」(p.55)
9. 就眠できないかもしれないという不安 (p.55)
10. 「激しい緊迫感が身に迫ってくる」(p.64)
11. 「死刑囚」と同じ死の不安 (p.65)

岸本英夫の生死観について

12. 「絶望の淵に立っていた」(p.65)
13. 哲学者ヒュームや評論家ガンサーの書物を読んで死について考えて見たいという衝動にかられた (p.66)
14. 「自分が、この世から消えてなくなる」と考えると身の毛のよだつような恐怖感 (p.67)
15. 「ゆっくり時間をかけて入浴した」(p.56)
16. 「絨毯の上で坐禅する」ことで心を静めようとした (p.56)
17. 「睡眠剤を飲んで、就眠するしかないと思えるほどの無力感、依存感をもった (p.56)

以上のような体験をした訳だが、その体験は、幾つかのカテゴリーに分類することが出来る。

- (1). 突然の出来事から来る感情的動揺
ショック、戸惑い、緊迫感、異常な昂奮、不安、絶望、無力感
- (2). 既存の適応行動パターンの崩壊
癌を負った岸本は既存の適応行動パターンの崩壊を経験
- (3). 自我同一性（セルフ・アイデンティティ）の崩壊体験
自分が別人として体験させられる。死刑囚の体験、自己理解の喪失
- (4). 自己コントロール機制の崩壊体験
いたたまれない恐怖感
- (5). 未来の崩壊（見通し無し、存在への脅威、先行き暗闇）
- (6). 一縷の光への強烈な希求がある

この様な体験の中で、岸本は自分の死をどの様に生きたか。岸本は得体の知れない暗闇に怯え恐怖感に捕らわれた時、岸本は四つの事をしたという。

第一番目は、哲学者ヒュームや評論家ガンサーの書物を読んで死の問題の解答を求めた（「死よ奢るなかれ」）⁽²²⁾。興味深いのは、癌を負った岸本は不安と

恐怖の中で怯えながら、哲学者や評論家の中に、人生の究極的問題である死の解答を見付け出そうとした。ここに宗教学者岸本の一面を見ることができる。

第二番目は、坐禅を組んで数息観を試みて、心を静めようとしたことである⁽²³⁾。岸本は幼少時代から父親の岸本能武太から岡田式数息法を教えられ、青年時代には禅堂に通った経験があった。30分間じっくり坐ることができ満足したのである。岸本は若いときに経験したことを生かしそうとした。多くの場合、身体に身に付いたもので、危機状況を乗り切ろうとするのである。ここでは心理学的方法を用いて、心の平静を取り戻そうとした様子が分かる。

第三番目は、風呂に入ることで気持ちをゆるめることであった⁽²⁴⁾。これは多少の効果があった。緊張し、高まる心を落ち着かせ、緩めることで平常心を取り戻そうとしたのである。癌の告知で岸本が、心理的方法で落ち着かせようとしたのみならず、物理学的方法を用いたことが分かる。

第四番目は、睡眠剤を飲むことである。岸本には睡眠剤を取ることに内心、抵抗があったようであるが、その夜睡眠が取れるかどうか、自信が無かったのである。岸本はここで薬物の助を借りたと言える。このことには自己罪責感を持ったようで、「睡眠剤を飲むようでは、だらしがないぞ、と自分を叱っていた」⁽²⁵⁾と書いている。

以上の事から、岸本が危機状況を乗り越える手段として用いたものは、哲学書や評論家などの書物に精神的解答や人間の知恵をもとめたこと、心理学的方法を試みた事、物理的方法を試したこと、そして、薬物的方法を試したことである。このように、岸本は危機状況に直面して、自分ができることは何でもしてみたのである。しかし、宗教に助けを求めることはしなかった。

さらにこの時期に岸本を支えたものは何であったか。岸本は「根本的な解決らしいものは、どこにも見出すことができなかった」⁽²⁶⁾と告白している。

以上のように述べているのを見ると岸本はこの時点(1956.3.22)で死の真の解決を宗教的に擱んでいたとは言えない。

岸本英夫の生死観について

第2期（再発、手術の繰り返し）（1958年11月－1961年11月＝2年間）

岸本がスタンフォード大学で1954年10月19日に大手術をした後、順調に快復して、大学の講義も普通に出来るまでになっていた。1958年の日本での国際宗教学会議の準備の為に多忙な日々を送っていたが、健康は支えられていた⁽²⁶⁾。

「このまま癌が再発しなければ、さきの大手術は徹底的な成功であった。私は癌からまったく解放されるとすら思い初めていた。」⁽²⁸⁾と告白するほどに健康であった。

ところが、国際宗教学会議が終わったあと、ユネスコ東西文化交流使節として北欧諸大学での講義をしていた途中、1958年にデンマークのコペンハーゲンのホテルでイボ状のものに気付き、「ギクリとして」⁽²⁹⁾、癌の再発ではないかと疑惑をもったのである。そして、年を越えて1959年1月にサンフランシスコのスタンフォード大学でクレスマン博士の診察を受ける。クレスマン博士は患部のイボ状のものを見るとすぐに摘出するように促したのである。その時の体験を次のように書いている。「これは、私にとって、大きなショックであった。心の中にまっ黒な夕立雲が、にわかにはじけたような感じであった」⁽³⁰⁾。この時点から再発を繰り返す月日が始まるのである。1960年秋には「怪しい小粒が群をなしてできた。……皮膚の移植が重なるので、その面積は次第に大きくなりハゲになり、それを隠すのに苦労するようになってきた」⁽³¹⁾。

癌の再発を契機に第2期が始まるが、約2年間の岸本の体験は、死がより近く感じられ不安、恐怖は一層深刻になっていった。（以下頁数は「死を見つめる心」（講談社文庫）の頁数を示す）。

1. 「大きなショックであった」 (p.84)
2. 「足のすくむ思いであった」 (p.80)
3. 「死の脅威」 (p.86)
4. 「心の中にまっ黒な夕立雲がにわかにはじけた」 (p.84)
5. 「心の奥に動揺」 (p.84)
6. 「かねての心配がホントウになった」との失望感 (p.84)

7. 「生命をかけたゲリラ戦」の開始という重い気持ち (p.90)
8. 「不安」(p.84)
9. 「肉体がむしばまれる」恐怖 (p.86)
10. 癌がいつ「活発な行動を始めるか」不安がつきまっとっていた (p.89)

第二期は、死が一層現実味を持ってくる時期である。最初の手術以来、小康を保っていた癌がにわかに活動し始めた。この時期の特徴は、第一期における死の体験が、感情的動揺、適応行動パターンの崩壊、自己理解の崩壊、自己コントロールの喪失体験、未来の崩壊などの体験、そして希望の希求などの体験を一層深化、強化させる傾向が見られるところにある。それを解決しようとして、がむしゃらに働き続けていた。

更に、この第二期には死への新しい発見をした時期である。「死は大きな別れの時」という新しい洞察を得た。これは岸本にとって新しい大発見と言う⁽³¹⁾。この時期にもう一つ、死の恐怖や不安などの原因を「生命飢餓感」という人間固有の欲求にあると気付いてきた。

再発体験の深刻さは二つの表徴的表現（イメージ）で現わされている。ひとつは「まっ黒な夕立雲が拡がる」という体験、もう一つは、癌を生き物として体験した二つをあげることができる。「まっ黒な夕立雲」の表徴は、将来の見通しの真っ暗さを示しているし、「拡がる」というのは、岸本の意志の届かない所で、覆いが被されてしまう無力的状況を暗示している。もう一つは「癌はやはり、私の体内でゆっくりではあるが、転移して進行つづけていたのである」⁽³³⁾と述べているが、癌細胞は無言の内に、ゆっくりと、確実に広がっていく「生き物」の表徴として表現されている。それは「急に活発に活動を開始して、全身を冒して生命とりとなる」⁽³⁴⁾と述べているが、ここでも、「生き物」の不気味さが表現されている。活発に活動するところに生き物の恐ろしさがひそんでいる。更に「肉体がむしばまれてしまう」と言う言葉には、自分の肉体に攻撃を加えてきている「生物」がいつか自分の身体全体に広がり、生命を奪おうとしている恐怖感が現れている。

岸本英夫の生死観について

この様な危機状況の中で岸本は活動を緩めるよりも、むしろ、がむしゃらに働きながら「死の悩みを忘れよう」としたが、それで死の恐怖を忘れることができなかった。「すでに内臓を冒しているかも知れない。そのような不安がいつも心にあった」⁽³⁵⁾。この様な手の打ちようの無い対象に、無気味なほど静かに確実に肉体が蝕まれている体験が、この時期の特徴である。1961年には10回に近い小手術を重ね、5回目の皮膚の移植を行わなくてはならなかった⁽³⁶⁾。このような体験を「手の打ちようのない無力感」と呼ぶ。

岸本の生死観（「死を別れのとき」）は以上のような精神的状況の中で形成されたものである。そのきっかけは、1960年1月に日本女子大学の創設者成瀬仁蔵氏を記念する講演会に岸本は講演を依頼されて、成瀬氏の告別講演の原稿や成瀬に関する資料を読んでいた時である。資料を読みながら、岸本は成瀬仁蔵の癌を負ったの生き方から、「死は大きな別れの時」と見る見方がひらめいたのである⁽³⁷⁾。岸本のこの考え方は、「死に立ち向かう自分の心の大きな援けになった」⁽³⁸⁾と述べている。この考え方は、生に重点を置いて生きる生き方で、死を積極的に受け入れる訳ではないが、生の先にあるものは未知であるから、敢えて問題としない生き方である。「生命の絶対的な肯定論者になった」⁽³⁹⁾という言葉には、敢えて実体を持たない死を相手にせず、専ら「生」のみに関心を集中するという岸本の意志表明が込められている。その結果は心の動揺が少し無くなったのである。しかし、心の動揺が全く解消した訳ではなかったし、その保証もなかった。この生死観を徹底して生きる為には小さな別れを積み重ね、練習することで最後の別れに備えなくてはならないのである。「死のような大きな別れは、準備しないで耐えられるわけではない。……このように心の準備ということに気づいて見ると、ずいぶん、心がおちついてきた。死というものが、今まで、近寄りたく、おそろしいものに考えられていたのが、絶対的な他者ではなくなってきた。むしろ、親しみやすいもの、それと出逢いうるものになってきたのである」⁽⁴⁰⁾と述べている。岸本は「死を別れのとき」と見ながら、その時の準備をしながら日常を生きたのである。岸本がこの時期に成瀬の生き方に出会ったことは、岸本に大きな意味があったと言える。この生死観について

は後で検討することにする。

第3期（安定期＝生命の保証）（1961年11月—1963年10月＝2年間）

岸本にとってこの時期は長い闘病生活の中で比較的明るい希望を発見できた時期である。きっかけは、1961年11月にニューヨーク市の国連の新図書館の開館式に出席し、そのあとボストン市に回って黒色腫の権威のハーヴァード大学医学部教授のフィッパトリック博士の診察を受けたことによる。この診察の結果は、「あなたの病状は珍しい例外的なケースですが、稀にはこのような例外もあります。」「出てきたら、できるだけ早く切り取らなければなりません。しかし、そうしていればあなたは長く生きるでしょう」⁽⁴¹⁾というものであった。岸本は「このような明るい見通しをきかされたのは、七年間の闘病生活中、これがはじめてだった」と喜び、直ぐに日本に国際電報を打った⁽⁴²⁾。息子の雄二は『父の死生観』の中に「このとき、父はものすごく喜んだ。ぼくはあんなに喜んだ父を見たことがない」⁽⁴³⁾と書いているが、専門医による生命の保証こそ、岸本が最も信頼できるものであった⁽⁴⁴⁾。その一年後(1962年秋)、再び、フィッパトリック博士の診察を受け、その結果、この病気では死なないと診断された。岸本の皮膚癌は悪性の黒色腫であることには間違いない。しかし、発達が異常に遅く、癌は皮膚の表面に限られているので丹念に摘出すれば、長生きできると。この専門医の診察結果は岸本を決定的に楽観的にしたのである。フィッパトリック博士の診察の3ヵ月後に書いた『命ある限りゆたかに—ガンでも死なない』の中で、岸本は「死の恐怖の影が私の心から消えた。私はいつの間にか、もう一度、平常心をとりもどしていたのである。……明るい希望にあふれている。……この時に一つの転機が私の心の中に起こったようである」⁽⁴⁵⁾と記している。

実はこの1961年と1962年の二回のフィッパトリック博士の診察結果に加えて、1963年5月ころから腫れ物が出なくなった事実も岸本を楽観的にした理由のように思われる。妻三世によると1963年5月を最後として、腫れ物はでなくなり、かかりつけの医師K博士は「先日来切り取った癌細胞の性格が変わってきまし

岸本英夫の生死観について

たね」と言った⁽⁴⁶⁾。これは岸本を死の不安から解放した。このように岸本にとってフイットリック博士とK博士の二人の専門的診断が決定的意味をもっていたことが分かる。

この時期、岸本はどのようなことを癌患者として体験したのか。それは癌が「得体の知れない」不安や恐怖を与える災難としてではない。むしろ、「付き合える相手」に変わり、死の不安や恐怖が去り、癌への対応の仕方が分かったのである⁽⁴⁷⁾。つまり癌との付き合い方、癌との適応パターンが分かって死は遠くに離れて行った。癌は消えていない。癌を背負いながら生きる方法を岸本が掴んだとき、明るさを取り戻していったのである。

死の不安や恐怖から解放されて解放感を味わった時期である。岸本の書物から当時の経験を拾い上げてみよう。(以下の頁数は「死を見つめる心」(講談社文庫)の頁数を示す)。

1. 「明るい希望にあふれている」(p.95)
2. 「死の恐怖」が消えた (p.94)
3. 「平常心をとりもどす」(p.94)
4. 積極的に生きる (p.223)
5. 仕事へ「専念した」(p.223)
6. 束縛感からの解放 (p.223)

これらの体験の本質的問題は以下のようなものである

1. 生命の保証
2. 心理的安定
3. 自己アイデンティティーの回復
4. 新たな適応行動パターンの獲得

さて、この時期の岸本の生き方には変化があったか。この頃から岸本はただがむしゃらに働くことから、与えられた時間を楽しむ生活への軌道修正している。生活の深みを味わい楽しむことの意味と重要さに気付いたのである。岸本

は心の余裕を持ち始めていた⁽⁴⁸⁾。「人生を深く見る目」⁽⁴⁹⁾を与えられたと述べている。

第4期 突然の再発と死（1963年10月—1964年1月25日＝3ヵ月）

しかし、このような安定した時期は長く続かなかった。1963年8月には自宅が増築された。10月には東京大学教授嘉治真三と一緒にワシントンの日米文化教育会議に出席したが、途中で高血圧のために倒れた⁽⁵⁰⁾。一日休息をとり翌日は会議に出席、10月20日に帰国。主治医（織田博士）の診察を受け、しばらく静養。11月9日に岸本が自分の使命として受け止め、かつ全精力を注ぎ込んできた東京大学図書館の改装式があった。改装式は野外会場で強風の吹く中であつたが、岸本は元気に演説をし終わった。帰宅後、大満足であつた。しかし、その日を境として疲れがどっと出たように家に引き籠って静養の生活が始まった⁽⁵¹⁾。「がっくりと疲れてしまい、気に入りの増築の部屋にぼんやり入り込んでいく日が多くなった。」⁽⁵²⁾。その年の暮れの12月2日、岸本は妻三世と神代植物園に行ったが、途中で疲れはてて帰宅し、そのまま寝込んでしまった⁽⁵³⁾。その後は家で休養を取る生活になる。自宅療養している岸本を気使って、南原繁が家人をせかせて、岸本を12月8日東京大学病院の吉利内科に入院させた。岸本の弟子のひとりの高木きよ子が恩師を見舞うと、「ひびの入った茶碗を石の上に投げつけてコナゴナにしてしまうようなことをしてしまった……」と岸本が洩らしたと高木は語っている⁽⁵⁴⁾。そこには、もっとしたい仕事や夢があつたと想像できる。高木が語っているように、岸本の心には、「岸本宗教学」や「岸本学」の構築を夢見ていたのではないかと思われる。また図書館の改装が終わったら学究生活に戻りたいという願望が強くあつたに違いない。その年の暮れには、一時、頭が朦朧としたようで、「明るい部屋を暗いといわれ、赤を白と思われた」と高木は書いている⁽⁵⁵⁾。次男雄二は『父の死生観』の中に岸本の最後の様子を書いているが、息子雄二とヨーロッパ旅行をしたいとか、家族にユーモアを話して笑わせたり、東大病院に入院してからもひとりひとりに「サヨナラ、サヨナラ」と別れの挨拶をし、遺言を細々と口頭で述べた⁽⁵⁶⁾。昏睡状態になって

岸本英夫の生死観について

も、回りの者に子守唄を歌わせたりする⁽⁵⁷⁾。1964年1月25日の夕方、60歳の生涯を閉じた。解剖の結果、癌が脳の中に黒ごまを撒いたように出来ていたという⁽⁵⁸⁾。

この時期の岸本は、肉体的、精神的疲労感が強く、自宅で静養、その後入院(12.8)の日々であった。疲労感は強かったが、癌から来る肉体的苦痛や精神的苦痛を訴えることは無かったようである。だから、家族と意思疎通するのに困難はなかった。高木の言葉によれば、最後には、意識混濁もあり、意識レベルも下がっていたようである。

岸本はこの時期、自分の死をどの様に受け止めたのだろうか。私たちの手に入る資料から見ると、ワシントンでの日米文化会議の途中で倒れたときも、岸本は死が間近だとは思っていなかったようで、帰国後も入院をためらっていた⁽⁵⁹⁾。外面的には特別に慌てもせず、悲しみもせず、従順に受け入れたように見える。しかし、高木の言葉から想像すると、内面的には岸本にも葛藤や無念さがあったように思える。宗教学に関わる学徒との研究は岸本の脳裏にあった筈である。「茶碗を石の上に投げつけてコナゴナにしてしまうようなことをしてしまった……」と言ったという言葉がそれを示している。それは志半ばで断念しなければならない生の現実を悔やむ言葉に見える。岸本ほどの人間が将来の学問的課題や展望を持っていなかったとは思えない。その課題が中途になることへの無念さは激しく感じていたに違いない。しかし、岸本にとっては自分の死を考えて、悩み悲しむよりも、今を生きることが重要であった。人間として「生存している」期間を人間としての責任と働きをすることが価値ある事であった。病気の自分を見守ってくれる家族、親族と会話し、ユーモアを語り、生きている意味を確認し、慰めを与え、かつ家族に伝えるべきことを伝え、約77日の闘病の日々のあと人生の幕を閉じて行った。これこそ、現代の教養人の死に方であると声高らかに叫んでいるかのようである。

この第4期の岸本には肉体的、精神的疲労感が強く見られるが、比較的平静に死を迎えたと言える。岸本が死を従順に受け入れられた理由は何か。幾つか考えて見よう。

1. 肉体的苦痛が少なかった。

一般的には癌に伴う疼痛が強く、モルヒネを主製剤とする鎮痛剤を必要とするが、岸本の場合はそれほどの疼痛がなかったようである。

2. 東京大学図書館改装を成し遂げた満足感があった。

岸本は図書館の改装を自分の使命と感じて、全力で仕事に当たっていたので、改装の完成は満足感を与えていた。

3. 10年間の病気との闘いをよく闘い精一杯生きたという自負、満足感があった。

1962年1月に執筆した『癌の再発とたたかいつつ』の中で、「何か真っ暗な前途のなかにも、人事を尽くしているような満足感が味わわれた」⁽⁶⁰⁾と過去を述懐しているが、岸本がこの発病以来、がむしゃらに働いたり、仕事に専念して来たが、それが「人事を尽くした」という実感を与えたに違いない。この実感が死の受容の一助になったと思われる。

4. 岸本が信頼する家族の理解と援助があった。

岸本が10年間癌と闘うことができた背後には、岸本と家族との間に深い信頼関係があった。「治療のことや私が死んで後の一家の生活問題など、一家中が集まってみなで隠しだてなく明けっ放しで話し合うことができた。」⁽⁶¹⁾ この様な信頼関係は岸本を余分な家族への気遣いや隠しだてをしなくて済ませた。家族は岸本の残された生命の充実の為に可能な限り最善を尽くすことで岸本を助けた。

5. 遺されていく家族の生活費の見通しがついていた。

岸本が初めに癌を告げられた時、妻三世に手紙を書いている。その中に、当時大学受験準備中の長男と高校生の次男の学費と家族の生活費のことを書いてある。「あれやこれやをかき集めれば今後、六、七年間は、三人で細々と暮らしていく費用はできるかと思う」⁽⁶²⁾と書いている。岸本には家族の生活の保証を得ることが重要であって、当時すでになんとかなる状態になっていた。これが岸本の心の負担を軽減したことは十分考えられる。

6. 宗教学者としても世界的に認められたとの満足があった。

岸本英夫の生死観について

岸本は東京大学の教授になったのは1947年（43歳）であった。岸本はハーヴァード大学で学んだが、将来その経験を生かして「東西の文化の掛け橋になるような仕事をしたい」とを望んでいたと妻三世が書いている⁽⁶³⁾。1953年夏からハーヴァード大学で日本文化を教えていた。更に、1958年11月にはユネスコ東西文化交流使節として北欧諸大学にて講義をしている。また1960年にもスタンフォード大学サマー・スループで講義をした。国際的評価を得たことは、岸本の宗教学者としても、十分満足を得たと思える。また、岸本の弟子柳川啓一は岸本の提唱した「宗教の操作定義」と「レリジオロジー」はイギリスの宗教学者マイケル・パイの「比較宗教学」でとりあげられて海外でも認められていたと書いているが⁽⁶⁴⁾、このような世界的評価は宗教学者として岸本は満足していたと考えられる。この事は、自己の人生への満足のみならず、自己の死の受容への一助であった。

7. 「死は別れのとき」であるとの生死観があった。

宗教学者岸本英夫は「死は別れのときである」との主張のごとくに淡々として死を迎えていったようだ。「旅出の荷物をつくったり知人に別れの挨拶をしたりしていると、だんだんに気持ちが準備されて来る。そのようにして、人間はいよいよの別れの悲しい刹那も乗り越えることができるのである」⁽⁶⁵⁾と書いたように、岸本の死の受容を支えたと考えられる。

以上のように岸本が死に直面しながら残された生命を生き抜かなくてはならない時、岸本を支えたのは単一の要因ではない。幾つかの要因が複合的に岸本を全人間的に支えた。残された時間を精一杯生き抜かせたのである。以上のことから、岸本を尊厳ある死の手本の様に見ることは過ちである。家族、医師、友人達の理解と協力があつたことは勿論のこと、岸本の社会的立場や業績やそれへの評価などが加わり、更に岸本の死後、残される家族のものの経済的生活の保証などがなくては安らかな死の実現は難しかったことが解る。

【3】岸本英夫の生死観—「死は別れのとき」の理解をめぐって

さて、ここで岸本の生死観について、詳しい検討を加えたい。岸本の生死観はいかなるものか、それがどれほど岸本を支えたのかなど検討してみたい。岸本にとって「死は別れのとき」という理解は新しい発見であった。この発見に到った事情は、すでに述べたが、1960年1月に日本女子大学での成瀬仁蔵を偲ぶ記念講演を依頼されて、準備の為に成瀬の告別講演や資料を集めて読んでいた時に思い付いたようである。成瀬は大正8年に肝臓癌で亡くなったが、成瀬は病体のまま担架で運ばれて告別講演したことで聴衆に限りない感銘を与えていた。成瀬仁蔵記念講演会では、岸本は「成瀬先生の宗教観」と題して、成瀬がいかに肝臓癌と闘ったかを述べた⁽⁶⁶⁾。実は、成瀬仁蔵の告別講演の中には「別れの会」、「送別会」という言葉があるが、岸本はこの言葉に触発されたように、「“死”というものは別れのときである」と、この記念講演会の中で語っている。岸本がこの言葉を公にした最初である⁽⁶⁷⁾。そして、これが岸本の「生死観」となっていく。

この生死観は、岸本の死を見つめながら生きる「生」の現実を支えたものとなった。岸本は何度も「死は別れである」と理解してから、死を恐れなくなったと告白しているからである⁽⁶⁸⁾。岸本が死に捕らわれず、生に向かって生きる精神的支えを与えたのは、「死は別れである」との生死観であった。

岸本は講演準備中に「死は別れのとき」と気付いて、講演原稿にその事を書き記した。講演後にこの講演の時を回想して「心の底から何か激しい気迫のようなものが、自分を突き上げて来るのを意識していた。……あとで思い合わせると、この機会に私の心には死に対するもう一つの見方が展開してきた。それは、死を大きな『別れ』のときと見ることである。人間には別れのときがある」⁽⁶⁹⁾と語っていることからして、講演時点では、単なる思い付き程度であった死の理解は、更に言葉が生命を得たかのようにして、講演後、「死は別れのとき」という言葉が生命力をもった生死観として凝結していったようである。

そして岸本の生死観の形成を考えると、ほとんど第一期、第二期（つまり、

岸本英夫の生死観について

1954.9.18—1961.11までの7年2カ月)に大枠が決定された。この二つの時期には、癌の発生、再発という死の脅威に襲われた時期であるから、死に怯える岸本自身を精神的に支える生死観が必要とされた時期である。特に第1期は生死観模索の時期で特定の生死観が形を成していたとは思えない。それが黒色腫の再発を契機として第2期に入り、1960年1月に成瀬の告別講演の原稿から触発されてから、「死は別れのとき」という生死観を獲得し、それが時間経過と共に、充実していったようで、死は実体をもたないから、恐れるに足りないと思うようになるのは、1963年の夏頃のことと思われる。それまでは、死は実体をもたないと断言するまでには至っていない⁽⁷⁰⁾。その為に、死に怯え、死を忘れる為にがむしゃらに働くことで死を忘れようとした。しかし、この生死観を得てからは、多少、死を直視し生に専念することが出来るようになった。

岸本の生死観は、発表された論文によって、その表現法は多少の差があるが、主要点は下記の通りである。(以下の頁数は「死を見つめる心」(講談社文庫)の頁数を示す)。

1. 死は別れの時である。「大仕掛けの、徹底したもの」(p.30)、「全面的である」(p.31)、「大きな別れ」(p.31)
2. 生にのみ実体があって、死は実体がない (p.21)
3. 死は実体である生命がない場所である (p.21)

この様な生死観から来る結果として、

1. 今の生を「よく生きる」ことに努力する (p.22)
2. 生命の絶対的肯定者になった (p.22)
3. 「死が絶対的な他者ではなくなった、むしろ、親しみやすいもの、それと出逢いうるものになった」(pp.31-32)
4. 死と「面とむかって眺めてみる事が多少できるようになった」(p.33)
5. 「しかし、そう生きていても、そこに、生命飢餓状態は残る」(p.23)

岸本の家族や親しい者たちが伝えるところからすると、宗教学者岸本英夫は静かに死を迎えていったようだ。すでに言及した様に、多様な要因が重なりあって、死に直面した岸本を支えた。その中に、岸本が十年間の癌との闘いの中で得た「死は別れのとき」という生死観があった。岸本の死に直面した生を支えたと考えられる。しかし、「激しい感情的動揺」、「適応行動パターンの崩壊」、「自己同一性の崩壊」、「自己コントロールの喪失体験」、「未来の喪失などの体験」、「希望の希求」、そして「手の打ちようのない無力感」などの問題の中にある心理学的、哲学的、宗教学的問題を「死は別れのとき」という理解だけでは解答に成り得なかった。「死は別れのとき」という生死観は生物学的合理主義的解釈である。しかし、崩壊した自己理解を回復し、喪失した自己に力を与え、未来の喪失に希望を与えられるとは考えられない。

「死は別れのとき」という理解は、死に直面した人たちがしばしば持つ「なぜ、自分はこんな病気で死ななくてはならないのか」とか、「死後の生命はあるのか」などという人生の不条理の解答となり得ない。岸本はそれらの間には「問うに値しない」と拒否し、生きることに集中せよと答えるに違いない。宗教学の課題として、死の問題を解決しなければならないと岸本は語っているが⁽⁷¹⁾、宗教学者岸本英夫にとっても将来の課題として残されていたと言える。

岸本英夫の生死観の問題点を以下述べることにする。

問題点（1）未完成な生死観

岸本はその書物の中で、「死は別れのとき」と理解して心がおさまったと書いているが⁽⁷²⁾、別のところには、それだけでは何にもならなかったと告白している⁽⁷³⁾。また何一つ助になるものは無かったとも書いている。ここに岸本の本音が見えている。ここでの私達の課題の一つは、死に直面した人の「不安や恐怖の解決」、「崩壊した自己同一性の回復」や「喪失した未来の再獲得」が求められている。岸本自身が癌の告知を受けた時、自分の中にその解決は無かった。だから悩み、苦しんだ。「死は別れのとき」という洞察を得て、多少の精神的安

岸本英夫の生死観について

定を得た。しかし、「何一つ助になるものは無かった」という告白は「死は別れ
のとき」であるという洞察さえも、岸本の心の問題を根本的には解決しなかつ
たことを告白していることになる。

問題点（2）死を非人格化する認識の誤り

岸本は「死を大きな『別れ』のとき」と見ている⁽⁷⁴⁾。この言葉の背後には、
死を非人格的出来事として理解しようとする現代人的思考がある。非人格的出
来事とは、理性的、知性的認知法をもって、死という出来事だけを見て「死に
逝く人間」を認識しようとしなないものである。死の現実が人間に与える情緒的、
感情的側面を無視する方法である。観念的「死」はある瞬間的出来事であるが、
現実の「死」は肉体的苦痛や断絶する人間関係や、社会的経済的問題を含むも
のである。そこには、深い悲しみ、後悔、痛恨、口惜しさ、人生への懷疑が生
起するのが一般的である。岸本は死を非人格化することで、その様な現実を見
ようとしなかつた。岸本はこの矛盾に気付いていたのではないか。岸本自身解
決できず、「やはり生命飢餓状態は残る」と告白して、生命欲が残り、死を受け
入れられず、死の先に全く希望を見付けられない悲痛な叫びを訴えていると見
える。

死を迎える人間は肉体的苦痛に加えて、不安、恐怖、悲嘆など人間固有の感
情は、もちろん、哲学的、宗教学的、経済的、家族的苦痛を経験する⁽⁷⁵⁾。岸本
はそれを否定しているといえる。生物学的出来事以外のものを認めないところ
に、岸本の生死観が現代人の魂の真の解答になっていない理由がある。岸本自
身が体験した「激しい感情的動揺」「自己同一性の崩壊」、「適応行動パターンの
崩壊」や「未来の喪失」などは人間存在を越えた次元から問い直すことでしか
解決を得られないもので、その意味で、正確には「霊的問題」であった。死に
直面した人が悩み苦しんでいるのは、永遠、超越性、無限、究極性といった次
元でしか解決を得られない問題である。岸本自身は、「死は別れである」と非人
格的死に関心を集中させることで、真の自身の心に生起する全人格的苦痛を直
視することを避けた。結果として現代人の抱える問題を解決できずに去ったと

言える。

問題点（3）すべての人の生死観に成り得ない

岸本は合理主義者で、事務的で、義理堅く、几帳面で、回りの人に対して非常に配慮をする性格であったようである。その根底には理性、知性尊重の価値観があった。柳川啓一は、「(岸本の) 学問の特徴はその人柄と同様に、いうにいわれぬ暖かみがある」と述べているが⁽⁷⁶⁾、岸本は回りの人々に気を配りながら、しかし、最後の瞬間まで回りの人たちに支えられながら、理知的判断と理性的自己統制の生き方を貫いたようである。入院を嫌う岸本を担架で自宅から東大病院へ運んだ。入院した岸本は「サヨナラ、サヨナラ」とひとりひとりに別れを告げ、訪室する人にはユーモアを話して死の前日まで人を笑わせていた。昏睡状態になっても、回りの者に子守唄を歌わせたりするほどであった。肉体的苦痛がそれほどひどくなかったから、頭は多少混濁の中でも、回りの人を気遣い、細々と遺言を話したり、ユーモアを話せるほどであったというから、岸本は最後まで理性的判断力を持ち合わせていたといえる。

この様に最後まで理性と知性で自己コントロールできる人は多くはない。体力、気力が衰えて、意識レベルが下がったときには、人は理性的知性的ではなくなりやすい。また、依存的に成りやすい。だから、岸本が出来たことが全ての人に可能であるとは言えない。多くの方は、体力、気力、理解力、思考力などに限界をもっている。極限状況ともいえる死の現実と直面して、正常な思考力、判断力を発揮できる者はおおくはない。岸本のように死を受け止め、死を迎えることのできるものは多くはない。その意味で岸本の生死観がすべての人にとっての有益な生死観となつて、死に直面した人を支えるものになり得ると思えないのである。

問題点（4）生死観に潜む矛盾

岸本の「死は別れのとき」という生死観は、格別新しい理解でないと相良は述べた。「死は別れのとき」であるという生死観は日本古来のものだという。す

岸本英夫の生死観について

で「死は別れととき」と見る生死観は死を非人格化するもので、全人格的理解に欠けることを述べた。そして、実は岸本が「死は別れのとき」と定義する場合、その主体が明らかにされていない。肉体は物質に分解するが、岸本自身が「大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまっただけ」⁽⁷⁷⁾と述べているように、自分の霊の存在を認める発言をしている。もし、死後、人間の霊が宇宙の霊にかえて永遠の休息に入ると、岸本が考えたとすると、岸本の生死観は科学的合理主義ではなしに、アニミズム的理解といえる⁽⁷⁸⁾。

岸本が「別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである」⁽⁷⁹⁾という言葉は結局、岸本自身の生命が永遠に継続することを願望したことを暴露している。合理的に割り切ることの出来ない魂の問題を抱えている岸本が浮かび上がってくる。科学を信頼し、科学的思考のみで判断した岸本の中に、永遠を求める霊の願望があることが解る。

問題点（5）死後には何が残るのか不明

岸本の生死観には、すでに見たように死後は「宇宙の霊にかえて」という言葉があるが、宇宙の霊に何が帰るかが明らかにされていない。岸本の中に内在する「霊」が、主体になりそうであるが、明らかにされていない。岸本は死をもってすべてが終わることを述べている。「肉体の崩壊とともに、『この自分の意識』も消滅するものとしか思われぬ。私自身は死によって、この私自身というものは、その個体的意義とともに消滅するものと考えている。」⁽⁸⁰⁾と述べている。にも拘わらず、ここで岸本が霊的存在を持ち出してきたことは、岸本の考え方に矛盾があったように見える。あるいは、岸本自身の生命の存続への願望が、理性的には否定しても、情緒的に、霊的存在として存続することを願望させたと言える。

【4】結論

1. 岸本の死の体験と生死観を見てきたが、岸本の死の体験は単なる「感情や情緒の問題」に終わらず、「自我同一性の崩壊」「適応行動パターンの崩壊」

「自己コントロール機制の崩壊」「未来の崩壊」という人間存在の根源的問題であった。それらの根源的問題の解決が岸本にあったと見えない。岸本の生死観は、それらの問題を自己の課題とすることさえしていない。

2. 以上のような問題を解決する為の生死観には、少なくとも、人間論、存在論、死後論などが含まれなくてはならない。岸本が提唱した「死は別れである」という生死観が死に直面させられている人への解答、支え、慰め、希望となるためには、人間の存在の根源を超越的側面から見直す必要がある。岸本の持つ平面的合理的人間理解では、自己存在の危機に対する根源的究極的解答にはならない。

3. 岸本の「死を見つめる心」が多くの癌患者によって読まれている理由は、現代人がもつ共通の問題を岸本が抱えていることを示すものである。岸本の持つ合理主義的、科学的思考方法は、現代人のそのものである。岸本の中に現代人の未解決の問題をみる。岸本は敢えて自己の生命を実験台に載せて見せた。解決の無い苦悩を自ら負い、何処まで耐えられるかを私達に見せている。しかし、岸本が比較的安らかにその生命を終えたには、沢山の要因が働いていたことは忘れてはならない。岸本のような強靱な性格も安らかに終えさせた要因のひとつである。そうならば、岸本のような強靱は性格をもたないものが誰でも、岸本のような生死観をもてば安楽に死を迎えられる訳ではないことは明らかである。

4. 岸本自身が、いみじくも「別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである」と言っているこの洞察には、死によって閉ざされる将来という時間で将来への道を開く唯一の可能性を見付け出そうという願望が働いている。岸本の頭の中には、やはり「閉ざされた世界」には希望も救いも生きる活力も見出せないことを見抜いていたようにみえる。

5. 岸本と同じように癌を負いながら、自己の人生と直面し、自己の現実を受け入れ、その中で、他者に配慮し、希望を与えながら死を迎えた人たちも多くいる⁽⁸¹⁾。彼らは岸本とは異なる死生観に立ち、岸本とは異なる宗教理解をもっていた。彼らも岸本と同じように死の厳しさや残忍さに出逢いながら、むし

岸本英夫の生死観について

ろそこに超越者との関係の中で自己の存在を見直し、死後の存続をみていた。そのような人たちの生死観には人間としての誇りと喜びがあり、それに加えて超越者との明確な関係意識があって、死を越える生命の確かさに満ちている。岸本の死は、逆にその様な生き方をした人たちの死の意味を鮮烈に浮かび上がらせる結果となっている。

【注】

- (1) 朝日新聞朝刊、昭和26年1月26日
- (2) 嘉治真三「岸本英夫を悼む」、朝日新聞朝刊、昭和26年1月27日
- (3) 増谷文雄『序にかえて』「死を見つめる心—ガンとたたかった十年間」東京、講談社 1973.3.15

この中で増谷文雄は、岸本英夫の生き方の特徴を二つの面から観察している。一つは、岸本の「死の受け止め方」である。もう一つは、「死の恐怖や不安の解決方法」である。前者については、「病気を負いつつ、死に直面しながらも、けっしてくずおれなかった」と毅然とした態度で死に立ち向かったという。そして、後者については、懸命に生きる、がむしゃらに仕事をする、自分の身を省みず頼まれた仕事を引き受ける、仕事に没頭することと解決しようとしたという。

- (4) 島田裕巳「自己の死を見つめる—岸本宗教学の誕生」、原題「岸本英夫における死の物語と心理学的宗教学の形成」、田丸徳善編『日本の宗教学説』東京大学宗教学研究室、1982、「フィールドとしての宗教体験」京都、法蔵館、1989.11 p.88、ここで、島田裕巳は「死の問題を考えるためのテキスト」として読み継がれていると書いている。島田の指摘のように幾つかの書物の中で取り上げられている。以下のようなものである。元木鶏二「死の淵をみつめて」東京、現代書館、1993.1.13、p.35、品川博二『臨床心理からみた死の問題』、関東学院大学人文科学研究所編「“死”を考える」東京、理想社、1994.12.10、p.99
- (5) 同書、 pp.88-123
- (6) 相良亨「日本人の死生観」ペリかん社、1984、p.183

相良亨はこの本の中で「日本人の無についての覚え書—別れとしての死」(pp.172-183)という章をもうけて、作家高見順と宗教学者岸本英夫を比較している。岸本が死を絶対的な別れと考えるに到ったことは、彼には「重大な発見」であるが、絶対的別離は「平家物語」の無常観につながるものであり、永遠の安らぎや西行、長明らの自然観や近世の天地観につながる

岸本英夫の生死観について

ものであると相良亨は述べている。

(7) 島田裕巳『父殺しの精神史』法蔵館、1993.6 p.200。島田はこの著書の中で相当の頁をさいて、岸本の主張した「死は大きな『別れ』である」を軸にして、岸本英夫論を展開している (p.22-42) ので参照。

(8) 脇本平也「死の比較宗教学」東京、岩波書店、1997、pp. 9 -44

ここで脇本平也は、岸本が死に直面しながら宗教とどの様に関わったかを考察している。特に癌発見後の十年間の時間経過に沿って、岸本の心理に焦点を合わせながら宗教の意味を問うている。

(9) 岸本英夫の「わが生死観」が何時頃執筆されたか。この問を解く決定的事実は論文の中には見付け難いが、論文の中に「最近十年間にわたった癌の攻撃も、やや下火になっている。この半年ほどは、ことによると、癌で死なないですむのではないかとまで考えることができるようになった」(pp. 14-15)とあることから、病状が安定した時期と考えられる。それは、ハーヴァード大学のフィッパトリック博士が、岸本は癌で死ぬことはないと告げた1962年12月以降のこの様に見える。この医者診察の結果は、岸本に決定的安心を与えたようであるから、岸本がここで「半年ほど」と言っている初めを1963年1月と考えて、それから6カ月と考えれば、この論文の執筆時期は1963年7月以降となる。では、何時頃までの間に書いたか。1963年11月9日の東京大学の図書館の改装式以降は、疲労の為、家に閉じ籠もって静養をとっていたので、この時期以前に執筆されたと思える。また10月に日米文化教育会議でワシントンに出かけたが、帰国後は疲労の為、静養していたから、会議に出かける前に一応原稿を書き上げておき、最後の手直しをして脱稿したとも考えられる。そうすれば、9月頃までには原稿が書き上がっていたとなる。結局この論文が書かれたのは、1963年7月かあるいは8月であったといえる。この時期は、岸本の家庭生活でも喜びの多い年であった。この年の二月には長男が結婚、五月以降は癌が現れなくなっていた。6月27日には還暦を迎え、八月には自宅の増築が出来上がったなど家庭人、父親として喜びの多い年で、それだけ精神的にも安定し、

死に対する緊張が薄れた時期である。この緊張の緩みは「わが生死観」の中にも見られる。

- (10) 岸本英夫は『現代人の生死観』の中で自分の立場を表明しながら、「死の問題に支えをおいて人生の問題の解決をはかり、生の問題が解決されると、さらに転じて、おのずから死の解決もあるというのが、禅のゆきかたである。私も、それと同じような考え方の方向をとってみたい。」と述べて、岸本の生死観が禅の立場に近いこと、それは死の問題に視点をあわせて生を観るものであると表明している。（『現代人の生死観』「死を見つめる心」p.137）。日本思想倫理研究者相良亨は、死生観を、おおよそ次の様に理解している。「死の受けとめ方と、日本人の死とのかかわりにおける生の理解」（相良 亨「日本人の死生観」ペリかん社 p.3）。また、日本古代呪術の研究者吉野裕子は、古代日本人のこの地上での生命の背後に広大な他界の世界があり、死後、人は他界に還ると考えていたと述べている。吉野の研究はその他界の世界を領する主は蛇であったと蛇信仰が古代日本人の死生観であると述べている（吉野裕子「日本人の死生観—蛇信仰の視座から」講談社 1982）。相良や吉野の指摘からも解るように、死生観は時代、国、文化などと深く関わり、その中で形成されるものであることが解る。そういう視点から見ると、岸本の生死観は現代の物質主義、科学主義的価値観に大きく左右されたと理解できる。
- (11) 岸本英夫『わが生死観』（1963.10）初出は理想11月号、「死を見つめる心」（講談社、1973、p.23）「私はもはやこの稿を終わらなければならない。いかにしてよく生きてゆくか、いかにして、『別れのとき』である死に処するか、このような問題をすべてあとに残して、しばらく筆をおく。」とある。
- (12) 岸本英夫『別れのとき』昭和36年7月16日 NHKテレビ放送。「死を見つめる心」（p.27）には「私はいろいろの宗教を外側にたって研究することを専門としている学究である。いろいろの宗教のおしえについては、裏も表も知っているつもりである。世間でおこなわれている宗教には、天国、地獄、極楽浄土など、死後の世界について説いているものが多い。しかし私

岸本英夫の生死観について

- は、そのような死後の世界があるとは考えていない。死に直面したギリギリの場にたっても、私の心は、そのような世界がありうるということに納得できない。」と書いている。「岸本英夫集 第六巻 生と死」pp.144-145
- (13) 岸本英夫「生死観三態」丁酉倫理会倫理講演集 第502輯 昭和19年8月「岸本英夫集 第六巻 生と死」東京、1976年2月12日、溪声社
- (14) 脇本平也、前書、p. 5
- (15) 同書、p. 6
- (16) 岸本英夫、『私の心の宗教』昭和37年7月12日—14日 NHKラジオ「人生読本」で放送。「死を見つめる心」p.42。「岸本英夫集 第六巻 生と死」p. 182
- (17) この時期の死の体験を書き残しているのは次のものである。
「アメリカで癌とたたかう」文藝春秋 1955年10月号
「別れのとき—死に出逢う心構え」 1961.7.16
- (18) 岸本英夫「アメリカで癌とたたかう」文藝春秋 昭和30年10月号。「死を見つめる心」p.52。「岸本英夫集 第六巻 生と死」p.90。
- (19) 岸本英夫「死を見つめる心」 p.54
- (20) 同書 p.55
- (21) 岸本英夫は癌告知の体験を詳細に観察し書き残した。そして、死の経験を解釈して、生存欲が脅かされる経験とし「生命飢餓状態」と呼んでいる。この生命飢餓状態は人間の基本的欲求である生存欲が脅かされることだと、岸本は述べている。この岸本の解釈は岸本の具体的体験を示すものではなく、怯える自分自身原因を説明する為の解釈である。その証拠に「生命飢餓状態」という解釈は岸本の死の体験のはじめには明瞭な形になっておらず、徐々に形成されていったものと見ることができる。この解釈が、はじめに出てくるのは1961年7月のNHKテレビで放送された「別れのとき」であり、そこには「自分の生命欲、生命飢餓感とたたかってゆく」(p.29)という言葉が出てくる。そして更に、1963年10月の「わが生死観」では「生命飢餓状態」という言葉が繰り返し語られる。そして「生命飢餓状態」と

「死の実体」とが重なって、「生命飢餓感」がもつ、心理的、肉体的脅威などが語られ、死の解釈がより明確に形成されていく過程を見ることが出来る。

- (22) 同書 p.66
- (23) 同書 p.56
- (24) 同書 p.56
- (25) 同書 p.57
- (26) 同書 p.67
- (27) 岸本英夫『癌の再発とたたいつつ』婦人公論 昭和37年3月号。「死を見つめる心」 p.82
- (28) 同書 p.82
- (29) 同書 p.83
- (30) 同書 p.84
- (31) 同書 p.89
- (32) 岸本英夫『わが生死観』「死を見つめる心」 p.22
「実は私には大発見であった」と述べて、死は実体ではなく、死を実体と考えることは錯覚であって、実体は生のみであって、与えられた生命を大切によりよく生きることこそ重要なのだと洞察したのである。
- (33) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」 p.84
- (34) 同書 p.84
- (35) 同書 p.89
- (36) 同書 p.90
- (37) 同書 p.87
- (38) 同書 p.88
- (39) 岸本英夫『わが生死観』「死を見つめる心」 p.22
- (40) 岸本英夫『別れるとき』「死を見つめる心」 pp.31-32
- (41) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」 p.90
- (42) 同書 p.89

岸本英夫の生死観について

- (43) 岸本雄二『父の死生観』「死を見つめる心」p.209、初出は「文芸春秋」1964年4月号。
- (44) 脇本平也「死の比較宗教学」、岩波書店、1997、p.36
「病気やそれに伴う苦痛に対してはまったく医者任せであった。医者の体現している現代医学の知識や技術に己を託して、疑ったり迷ったりすることはなかったらしい」と書いているように、岸本には病気に関する診断、治療、予後は全く医師に任せ、専門医を全面的に信頼していたようだ。
- (45) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」p.94-95
- (46) 岸本三世『主人の思い出』「死を見つめる心」p.223
- (47) 岸本英夫「命ある限りゆたかに」朝日新聞 1963年2月20日。「死を見つめる心」(p.95)
「私は数日前にも手術を受けた。左額にあらわれているメラノームの数粒をとり除くためである。しかし、私の心は、今少しも癌の恐れにおののいていない」。
- (48) 岸本英夫『別れるとき』「死を見つめる心」「静かにしていて、人生をあじわってゆく、その味わいかたの方がことによると、もっと人生をほんとうに生きるゆえんかもしれない」p.34
- (49) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」p.91
- (50) 岸本三世『主人の思い出』「死を見つめる心」p.224
- (51) 同書 p.224
- (52) 同書 p.211
- (53) 同書 p.211
- (54) 高木きよ子『解説』「岸本英夫集 第六巻 生と死」p.340
- (55) 同書 p.340
- (56) 岸本雄二『父の死生観』「死を見つめる心」p.212
- (57) 同書 p.212
- (58) 脇本平也「死の比較宗教学」岩波書店、1997、p.34
- (59) 岸本雄二『父の死生観』「死を見つめる心」p.211「父や入院をととても嫌がっ

た」と書いている。

- (60) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」 p.86
- (61) 同書 p.85
- (62) 岸本英夫『アメリカで癌とたたかう』「死を見つめる心」 p.62
- (63) 岸本三世 『主人の思い出』「死を見つめる心」 p.224
- (64) 柳川啓一 『解説』「岸本英夫集 第一巻 宗教と人間」 p.314
- (65) 岸本英夫 『癌の再発とたたかいつつ』「死を見つめる心」 p.87
- (66) 岸本英夫のこの時の講演は「桜楓新報」第102号 昭和35年2月号 日本女子大学、その後「女子大通信」第134号にも掲載された。
- (67) 宗教学者柳川啓一はこの成瀬仁蔵の記念講演を読み、成瀬の講演と岸本の意識変化との関連性を調べてみた。柳川は二つの間に関連性が見つからず、何故、岸本の内に意識の変化が起きたかが疑問だと述べている。（「現代日本人の宗教」、法蔵館、1991、p.20）しかし、成瀬の告別講演の中には、明確に「別れの会」「送別会」という言葉があるから、これらの言葉によって触発されたものと見ることもできる。というのは、この言葉は岸本が熟考しての結論というよりも、むしろ、外からの刺激で気付いたもので、『死を見つめて生きる』（読売新聞、1961.10.29）では「ふとした機会から、私は死と人間の『別れ』とを結びつけて考えるようになった」（「岸本全集 生と死」p.155）とある。成瀬仁蔵の原稿の中にある言葉に触発されたと見ることで「ふとした機会」という意味が理解できる。
- (68) 岸本英夫『別れのとき』「死を見つめる心」講談社 p.33 「『別れのとき』という考えかたに目ざめてから、私は、死というものを、それから目をそらさないで、面とむかって眺めてみる事が多少できるようになった」と書いている。
- (69) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』「死と見つめる心」 p.87
- (70) 岸本英夫の生死観は次の論文の中で触れられているが、その形成過程は順に見ると明らかになる。

昭和36.7.17 NHKテレビ『別れのとき—死に出逢う心構え』 pp.24-34

岸本英夫の生死観について

昭和36.10.29 読売新聞 『死を見つめて生きる—ガンをいただいて七年』

昭和37.1 「婦人公論」 同年3月号 『癌の再発とたたかいつつ』 pp.86-88

昭和37.6.9 毎日新聞 『死を見つめる心—ガンと闘って八年間』

昭和38.10 「理想」 同年11月号 『わが生死観』

はじめは単なる思い付きの程度であったが、徐々に概念としての内容をもち始める。最終的な形になったのは『わが生死観』の時点である。

- (71) 岸本英夫『人間と宗教—問題の所在をたずねて—』 「死を見つめる心」 p.152
ここで岸本は死の問題の解答は「宗教に課せられた役割」と断言している。
- (72) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』（「死を見つめる心」 p.88）には「死を別れと見るということは、毎日毎日、心の中で別れの準備をしておくということである。この考え方も、死に立ち向かう自分の心の大きな援けになった。」とある。
- (73) 岸本英夫の『わが生死観』は先に述べたように、1963年の7月あるいは8月に書かれた論文で、ほとんど絶筆となった論文と言ってよいものである。その中で「生命飢餓状態が深刻になるほど、疑いに拍車がかげられ、自己の分裂はますます深まる」（p.20）と生命飢餓感にさいなまれる自己を告白している。
- (74) 岸本英夫『癌の再発とたたかいつつ』 「死を見つめる心」 p.87
- (75) 世界保健機関編、「がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア」 武田文和訳、金原出版、1990。これはWHO 専門委員会報告書 第804号である。
- (76) 柳川啓一『解説』 「岸本英夫集 第一巻」 p.306
- (77) 岸本英夫『私の心の宗教』 「死を見つめる心」 p.38
- (78) 神学者近藤勝彦は、岸本英夫の生死観について論じつつ、岸本が「宇宙靈魂」や「宇宙生命」などと言い出したことに対して、「アニミズムの響きを感じられる」と述べ、「日本の知識人が自家製の宗教的世界観の表象に到達したということであろう」と厳しく批判している。近藤勝彦「癒しと信仰」 教文館、1997、p.233
- (79) 岸本英夫『私の心の宗教』 「死を見つめる心」 p.33

- (80) 岸本英夫、『わが生死観』同書、p.18
- (81) 原崎百子「わが涙よ、わが歌となれ」東京、新教出版、1979.3.、重兼芳子
「たとえ病むとも」東京、岩波書店 1993.12